

患者さんに寄り添って

「看護師」を目指す

わたしは昨年、看護師として自治医科大学附属病院に就職しました。

今回、「新人看護師」の枠で当コラムに掲載されるお話を突然いただきました。文章にして伝えるというのはあまり得意ではありませんが、この1年間で感じたことを思いのままに書いていきたいと思っています。

20歳のとき、小学生の時に書いた未来の自分への手紙が郵送されてきました。そこには「大きくなったら人を助けるお医者さんになりたい。」と書いてありました。当時、自治医科大学看護学部に通っていたわたしは、小さい頃から心のどこかに医療に対する夢があったのだと、自分でも忘れていた夢に驚かされました。

具体的に看護師を意識したのは高校生の時です。わたしは短期間ですが入院した経験があります。当時、毎日元気にテニスの部活動に取り組み、病気とはまるで無縁な生活を送っていたため、まさか自分が…と信じられない気持ちでいっぱいでした。入院、手術という事実を伝えられ、うまく状況を受け入れることができないまま、入院の日となりました。手術の痛みってどれくらいなのか、もし失敗したらどうしよう…

と、マイナスな考えばかり浮かんで

きますが、感情をうまく表すことができずにいました。すると、看護師さんはわたしの様子に敏感に気づき、「手術初めてだものね、不安なのは当たり前だよ。眠れないなら、もう少し話聞くからこっちへおいで」と部屋の外に連れ出し、話を聞いてくれました。自分の思いを伝えることで気持ちがすっと軽くなったのを覚えています。その入院中、様々な医療職の方と関わりました。チームで連携して、多角的に患者を捉えて関わる姿はとても頼もしく思え、わたしも細やかな気配りや声掛けをしながら患者さんと関わっていきけるような看護師を志すようになりました。

自治医大へ

看護師になるにはいくつかの教育課程がありますが、一般的には、専門学校で3年間、もしくは大学で4年間学び、国家試験に合格した後初めて資格を得ることができます。

わたしの場合は、自治医科大学看護学部で4年間学びました。学生時代は、寮に入り集団生活をする中で、友人と多くの時間を共有しました。敷地内のグラウンドにみんなで流星群を見に行ったり、毎日のように部活動に打ち込んだりと、思い出



血液内科の先輩方と。頼もしく優しい先輩のようになれるよう日々奮闘中です

深い学生生活を送ることができました。また、当院は大学に併設されているため、学生時代から病院に慣れ親しむことができます。人にも環境にも恵まれたこの自治医大で仕事をしたい。それが、当院に就職を決めた理由の1つです。それに、最も大きな理由は、新人看護師への研修制度が魅力的だったことです。

当院では、就職して1年目に3つの部署を回る3部署異動研修というものがあります。外科・内科・単科それぞれの部署を3〜4か月かけて回り、各部署特有の看護を経験することができず。そのため、この制度での経験により、幅広く患者さん

を捉えることができるようになったと思います。

笑顔で向き合う

当初は患者さんと普通に会話する余裕もなく、「ちよつと大丈夫？先輩呼んできてよ」と言われたこともありました。徐々に業務にも慣れ、現在2年目になりました。日々働いている中で自分はどんな看護をしたいのか、どんな看護師になりたいのかを考えることがありません。わたしは現在、血液内科に所属しています。当科には化学療法や骨髄移植を行い、長期に渡り闘病生活を送る患者さんが多くいらっしゃいます。難しい治療の効果が期待しつつ、日々の入院生活を過ごす患者さんの様子を見てみると、少しでも患者さんが、不安な想いを表出できるように関わりたいと思います。そのため、どうすればいいのだろうと迷いながらも、毎日笑顔で患者さんに向き合い、患者さんの話に耳を傾け、声をかけるようにしています。まだ、2年目で経験は浅いのですがこれからもそのモットーを忘れずにこの人なら話してみようと思っただけのような看護師になっていけるよう日々頑張っていきたいと思えます。

自治医科大学附属病院

4階西病棟

看護師

関 陽香